

『先真文明時代』への覚書 3. 便利に抗う復元力

2015.11～2016.2.10

物語に「おわり」はあるのだろうか。いつまでも白昼の時代を求めながら、実際にはとうに昼下がり過ぎていた。黄昏へと向かう最後のあがきのような残照が照り付けている。これは歴史の終わりのことなのだろうか。改めて、私が思うに、黄昏の時代カリユグはゆったりと暮れなずみ、暖かな家路へと向かうように、平穏な市民社会への移行が望まれるのではないのだろうか。

自然選択は適者生存とも言い換えられる。適者生存は必然に、偶然が加わり、かなり中立的な概念でもある。しかし、大方はこれを弱肉強食と解釈して、強者の権謀術数が弱者を支配する世界と誤解させる。社会ダーウィニズムによる解釈としての弱肉強食ではなく、生態系の中での食物連鎖であり、自然の歴史であり、現在の見かけの強弱によるものではない。権力（権威）には主に 5 種類がある。これらは政治、軍事、金銭、宗教、科学であり、昼下がりでの強い力はなお名利を求めて争うことによって勝ち取られる。露わな悪意をぶつけ合う争いは人々を「虚無」へと向かわせながら、「虚無」に目をふさぎ、忘れるように、出来合いの「便利」が機能する。人々は自ら生きる苦楽よりも、与えられる娯楽に心身を委ねる。自由からの逃走である。

一方で、相互扶助をとらえて、自由、平等、友愛につなげようとする少数者（着実に増えてはいる）の理解もある。過剰な名利を求めるのを自律して、不公正な競争から程よく身を引けば、自然（じねん）素のままの美しい暮らしに近づける。黄昏の時代は穏やかにゆっくり流れ、連続的に、満天の星空を見上げながら、再び陽が昇る新しい朝を迎えるだろう。人々の希望はここにある。

しかし、今は便利コンビニエンスが世界を襲っている。何もかも計算機、無人機械が代行する。グローバル化を喜んで、国際コングロマリット、大企業から、中間組織、チェーン店に心身を委ねていると、過去や未来をも消されて、どんどん人でなしになってしまう。人間は精神性を見失い、意志薄弱となり、機械に隷属する。便利な外部装置に依存し過ぎることによって、身体的能力、生物としての能力を著しく低下させる。心の構造と機能も、隷属的に順応していく。これはヒトとして退行進化の段階に入ったことになる。多くの人々は「進化」が前に進む良いことと妄信しているようだが、生物の歴史を学べばわかるように、ハイパーモルフォシスから、袋小路的過剰な定向進化、結局、種としての滅びの道に向かったこともあった。

古来、真善美を求道した人々の多くは偉人たちの多くは時の権力者に無残に殺され、また、死を命ぜられてきた。現代には、殺さない自由、殺されない自由があると社会的に堅固な合意を形成したい。殺傷は美しいものではない。とても痛い、惨たらしい。傷は元に戻らないし、生き返ることはない。実際の外傷は、心にも癒えない傷を負わずと、高橋和己は書いていたような気がする。はたして、ゲームの世界で、バーチャルに妖怪や怪獣

を、人々をモニターの中の戦場で殺傷することは、心身にどのような影響力をもつものか。心の暗闇を溶解する代償行為の範囲に止めてほしい。悪意を善意に変えることは容易ではなく、暗闇を公明正大に向かわせるのは困難な作業で、この社会をよくするための歴史に終わりはないのだろう。より善き思いに向かって絶え間なくゆっくりと文化を洗練することだ。

自然への畏敬、食べ物への感謝を失った現代文明の増上慢。より多くを奪い合うのではなく、より善くなるように競い合うことだ。人を羨まず、自分を卑下せず、自分そのものを素心に生きる。自分の暮らしをほどほどの快適さに自律制御する。すなわち、足るを知る、知足。欲望を自律制御せずに、過剰な便利に押し流され、自失しないことである。過剰な便利さを自律しなければ、自らの限度をもって部分拒否しなければ、便利に隷従する。便利に抗う生活の復元力は、伝統的な生活技術の継承により、保持される。意志的に不便を求めて、暮らしの技術や技能を忘れないように磨く必要がある。

個人の直接体験、冒険・探検をバーチャルに求めるのではなく、危険を伴う現実に経験すべきである。失敗を繰り返してこそ、技能も知恵も身に付き、自らがすべてを完結させる達成感、生きる楽しみ、これらが実感としてある。身体的傷害を負わない、死なずに、生き返るゲームの世界ではない。冒険を少しもしない人生は、虚無の下にある。新たな機会と人との出会いを求めて旅に出てみよう。便利に抗い、人生を遅しく、楽しく過ごすための再ルネサンス、人として生きる復元力はまだ獲得できる。

注：高橋和己 1971、黄昏の橋、筑摩書房、東京。